

少人数指導部会 研究のまとめ

■ 2つの等質グループによる少人数指導について

〔成果〕

○一人一人の子どもに目が行き届き、問題の理解度や学習態度などの学習状況を把握しやすい。その結果、個々の児童の評価に費やす時間が短縮されるので、学習効率が上がり、基礎基本をしっかり定着させることができた。

（T・Tで多人数を二人の指導者で見える場合よりも、少人数を一人の指導者が見える場合の方が、一人一人の子どもをしっかり見ることができる）

○多人数の場合に比べて「先生によく見てもらえる」「声をかけてもらえる」という安心感が教室にあり、子どもたちは落ち着いて学習に取り組むことができた。

〔次年度へ提言〕

○担任と少人数担当で事前に綿密な打ち合わせを行い、「ねらい」「指導内容」「指導方法」について共通化を図る必要がある。そのことが、習熟度別学習への円滑な移行に不可欠であると考えられる。

○TTから少人数指導そしてプレ習熟度別学習への流れについては以下に示した時期が適当と考えられる。

<1年>

<2年>

入学	2学期	4月	1月
T・T	▶ 少人数指導開始		▶ プレ習熟度学習

※入学後の1学期は、2人の指導者で児童理解に努め、併せて学習訓練を徹底する。

1年生の夏休み後に個人差がはっきりしてくること、9月上旬までにプール指導があること、1学期末に保護者への説明が必要なことなどから、1年生の少人数グループ指導は2学期開始が望ましい。

※2年生は1年次に経験済みなので、4月当初から開始すべきである。プレ習熟度別学習については、学年懇談会などでその必要性を保護者に説明し、1月より開始が望ましい。

○少人数部会では、どちらの学年も「ひき算」を授業研究単元に取り上げ、学習内容の縦の系統にも重点を置いて研究を重ねた。その結果、それぞれの学年での指導ポイントがはっきりし、授業案作成時に大変参考になった。「くり下がりのひき算は減加法で」という指導方法の共通化を図ることにも有効であると考えられる。

■ 次年度、参考になる点について

○ボランティアティーチャーの活用

- ・今年度は、15～16人の等質少人数グループに分けて指導できたため、ボランティアティーチャーを活用する必要がなかった。（1年生～活用なし）
- ・学習の習熟段階で、丸付けをしてもらった。子どもたちの待ち時間が減り、意欲を持続させながら学習を進めることができた。（30人を越えるグループでは特に有効だった。）
また、単元によっては手作業を伴うものがあり、一人一人の子ども理解度を確かめながら定着を図る上で、たいへん有効だった。（ものさしの使い方など）
- ・学年当初に呼びかけて必要人数より若干多めに登録してもらった。登録メンバーの中のリーダーを中心に連絡を取り合い、必要な時に来てもらうことができた。
- ・丸付け以外の活用を考えた場合、打ち合わせの時間を設けて、指導の方向性やつまずきのある児童への手だてなど、細かいところまでの確認が必要になるが、現状は困難である。

○スキルタイム

- ・1年生～10の構成の習熟を図ったり、まず計算の段階的な指導を行ったりした。特に、まず計算については、計算時間だけを重視することなく、最後までやり遂げることを目標として1段ずつ増やしながら慣れさせていった。また、各クラスに左利きの子どもが2～3名いるため、左利き用のプリントを作って使用させた。その結果、一人一人の計算力を伸ばすことができた。
- ・2年生～百ます計算に取り組ませた。発達段階を考えて、学年当初は7分を、夏休み以降は5分を目標にして取り組ませた。その結果、ほとんどの子どもたちが目標を達成することができた。

○学習習慣の形成

- ・1年生～宿題は、他教科も含めて担任だけが出すようにしていたので、量的な負担はなかった。
- ・2年生～担任とグループ担当者の両方から出ることがあり、負担になっていることがあった。（子どもたちの負担を考えると、こまめな打ち合わせをしてから宿題を出す必要がある）

○学習用具

- ・少人数指導に取り組んだ結果、両学年とも忘れ物が減った。
- ・子供用として、次のものを1クラス分学校で揃えてもらいたい。（タイル・時計・竹ひご・ものさし）